# フルートの吹奏時におけるバズィング音
## －原因究明と改善方法－

井出　朋子

*Tomoko Ide*

### はじめに

フルートの音は奏者のアンブシュア[1]から生み出される。そして音色(ねいろ)は空気が楽器に入る最後の通り道であるアパチュア[2]によって左右される。フルートを学び始めた者にとって、いかに最適な唇の形状を探し、その筋肉を開発させていくかということは、最初に立ちはだかる壁であり、永遠の課題と言っても過言ではない。奏法は経験年数を重ねる毎に、安定するかの様に見えても、フルートを続けている限り、様々な課題と向き合っていくことが現実である。その中の一つに、吹奏時においてバズィング音が発生するアンブシュアのトラブルが挙げられる。バズィング(英：buzzing)とは、金管楽器の奏法の一つで、息によって唇を振動させる技術でありフルートには無用のはずである。しかし、フルートの演奏時のトラブルとしてしばしば出現し、初歩の学習者のみならず習熟者にも潜在し、現れ出ることがある。本稿は筆者のこれまでの演奏活動と指導経験の両側面から触発されたものである。今回の研究にあたり、アンケート調査[3]及びインタビュー調査[4]を実施し、この問題の原因究明と、どの様な改善法を提案できるのかを検討する。

---

[1] 仏：Embouchure 字義は「～への入り口」の意味のフランス語だが、音楽では管楽器を演奏するときの楽器をあてがう唇の形の意味で用いる(ポーター 1979:8)。

[2] 英：Aperture 上下の唇の開き(ネルソン 2010:29)。

[3] 調査期間：平成 28 年 6 月 4 日～平成 30 年 12 月 15 日
回答者：フルートを学習中の中学生、高校生と大学生以上

[4] 調査期間：平成 30 年 10 月 10 日～同 12 月 15 日
回答者：フルート指導者の 7 名

## １．アンブシュア・トラブルとしてのバズィング音

今回の研究のために実施したアンケート調査の結果(後述)から、対象者の全員から「バズィング音を起こした経験がある」と回答を得た。
このことからトラブルとして出現するバズィング音は、フルートの上達過程において不可避の事例と言うことができるのではないだろうか。

### １．１　先行研究及び指導法

フルート奏法に関する論述や教則本の中から、バズィング音に関する記述はほとんど存在せず、十分な議論がなされていないことが窺える。
教則本においては、フロイド著『フルート奏法 成功への鍵 ジェフリー・ギルバートのレッスン・システム』の中に見られ、以下に引用する。

> 高音域でバズィング音がするのは、上唇に圧力がかかりすぎているためである。アンブシュアは緊張させないようにしなくてはならない(フロイド 1995: 78)。

では実際のレッスンの場ではどのような指導が行われているのだろうか。
今回のインタビュー調査では、７名のフルート指導者から、生徒のバズィング音の発生に対しその要因と指導内容について回答を得た。

インタビューの結果、要因として考えられることは「唇全体の緊張によるもの」(５名)、「下唇を横に引く力が強いため」(１名)、「口の周りの筋肉の未発達が原因」(1名)が挙がり、指導者により見解の相違が認められた。

それに対して、指導法は一様に「唇の力をリラックスさせること」に留まり特別な対策を講じている様には見受けられなかった。これはバズィング音の発生がしばしば起こり得る偶発的な現象であるために、指導者自身が大き

な問題として捉えていないことが理由の一つであると推測する。

## １．２　アンケート結果から見るバズィング音の発生状況

今回のアンケート調査の結果からバズィング音の発生状況について明らかにしたい。

### (１)バズィング音の経験について

フルートの吹奏中にバズィング音を起こした経験の有無と対象者の年齢を表１に記す。

**表１**　　（単位：人）

| 年齢 | バズィング音を起こしたことがある | |
|---|---|---|
| | 経験がある | 経験がない |
| 中高生 | 15 | 0 |
| 大学生以上 | 10 | 0 |

### (２)バズィング音の発生時の音域について

（１)の対象者に、発生した音域を回答してもらった。表２は中高生と大学生以上に分け、音域はフルートの低音・中音・高音域に分類し表２に記す。

**表２**　　（単位：人）

| 年齢 | 低音域 | 中音域 | 高音域 |
|---|---|---|---|
| 中高生 | 1 | 0 | 14 |
| 大学生以上 | 0 | 0 | 10 |

### (3)バズィング音の発生状況や理由

バズィング音の発生状況や理由と考えられることについて自由記述の結果を以下に記す。

| | |
|---|---|
| ・唇の力みがある時 | ・高音を大きな音量で出す時 |
| ・唇が緊張している時 | ・フルートを始め間もない頃 |
| ・唇が息の圧力に負けている時 | ・ピッコロを吹いている時 |

## 1．3　バズィング音の発生時の特徴と傾向

バズィング音の発生状況(強度・時間・身体反応)を分析するために、筆者がフルートの吹奏時にバズィング音を発生させて調査を行った。

試行方法は高音域($c^4$～$e^4$)において通常の奏法と故意にバズィング音を発生させたアンブシュアを比較した。図1は通常時の高音域のアンブシュアである。

図1

図2

図２はバズィング音が発生した瞬間のアンブシュアである。アパチュアの開きが狭められ、上下の唇が接触していることが確認できる。

バズィング音が発生すると、該当する音は摩擦音(bu の音)にかき消されてしまう。摩擦音の音量は唇の振動の強さに比例し、ごく小さな音量から、聴衆の耳に届くまで、様々なレベルがある。摩擦音の持続時間は概ね短くすぐに止むが、数秒間にわたり持続する事例や演奏中に頻発するのは、奏者のアンブシュア制御不能や精神的な緊張に起因すると考えられる。

## １．４　発生要因

バズィング音の発生要因として次の３点が考えられる。

①奏法の要因(奏者自身の誤った奏法)

②指導の要因(誤った指導方法)

③環境の要因(演奏疲労、心身の緊張)

②、③については改めて調査を行い別の機会に述べることとしたい。ここでは①の奏法の要因を指摘として以下に挙げた。

### (１)唇の圧迫によるアパチュアの狭小

極度に締め付けられたアパチュアの状態のまま、速度の速い息を吹き込むことがバズィング音を引き起こすと考えられる。フルート奏法ではアパチュアの開閉変化をすることで息の速度や角度を調整し、低音から高音を吹き分けている。中音域から高音域ではアパチュアの開きをわずかに狭めることによって気流速度が上がり、その結果高い振動数の音が得られる。しかし、このアパチュア開閉に関わる筋肉の伸縮技術が十分に発達していない、または機能しない場合や、息の支えが不十分であると、口元に頼り必要以上に強い息を吹き付けてしまうのだ。高音域に熟達していない初歩の学習者に多く見

られる誤った奏法である。習熟者において、口元付近の筋肉が発達しても猶、バズィング音が出現するのは、この悪癖を思い出してしまうことが一因と言えるだろう。

### (2)楽器の保持不良によるアパチュアの狭小

誤った楽器の持ち方がアパチュアに悪影響を及ぼしバズィング音を引き起こす。第一に手や顎の力で楽器を内側に回すことや、左手の力で楽器を唇に強く押し付けることでアパチュアを狭小状態にしてしまう。第二に歌口と下顎の支点が適切でないために、楽器が前後に揺れ動き安定した音が得られない。不安定な音なまま力任せに息の速度に頼ることがバズィング音を起こす引き金となる。

## 2．改善に向けた練習法

前章における要因の考察を踏まえ、バズィング音の発生防止を図るためには、正しい息の支えに基づきアパチュアを柔軟に保つこと、その開閉を自在にコントロールする技術が必要であると考えられる。

奏者が要因を理解した上で、日頃からトレーニングを積み重ねることで、吹奏中のトラブルにも速やかに対処することが可能となる。以下に作成したエクササイズには各譜例の上部にその練習方法と留意点を記した。また練習の初期段階では、鏡を使用しアパチュアを目視で確認しながらエクササイズを行うことを薦めたい。

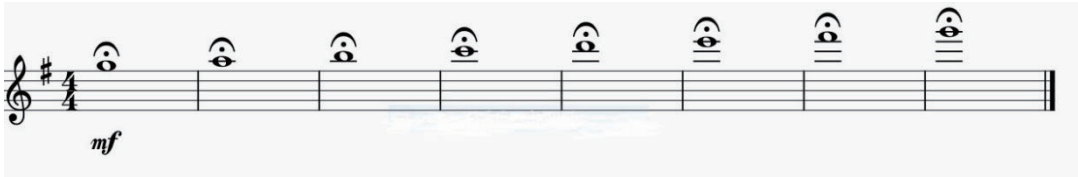
### (1)アパチュアのサイズをコントロールするエクササイズ

方法：①通常の奏法。　　留意点：①アンブシュアを変化させない。

②アパチュアを狭くする。　　②息圧を一定に保つ。

③アパチュアを広くする。

**譜例１**




**（２）息の速度をコントロールするエクササイズ**

方法：①アパチュアを狭くし速い息から徐々に遅い息に変化させる。

②アパチュアを広くして遅い息から徐々に速い息に変化させる。

留意点：譜例１を使用する。

**（３）アパチュアの変化とダイナミクスをコントロールするエクササイズ**

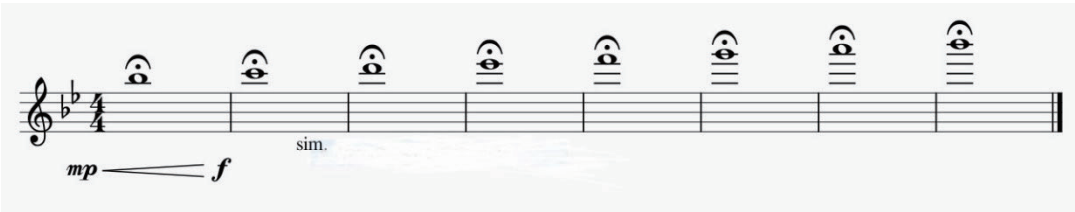
方法：①空気量を増加させ自然とアパチュアが広がることを認識する。

②アパチュアを変化させながら空気量を増加させる。

留意点：アパチュアを広げる際に上下の歯の隙間をわずかに開け

唇を縦方向に広げる。譜例２を使用する。

**譜例２**

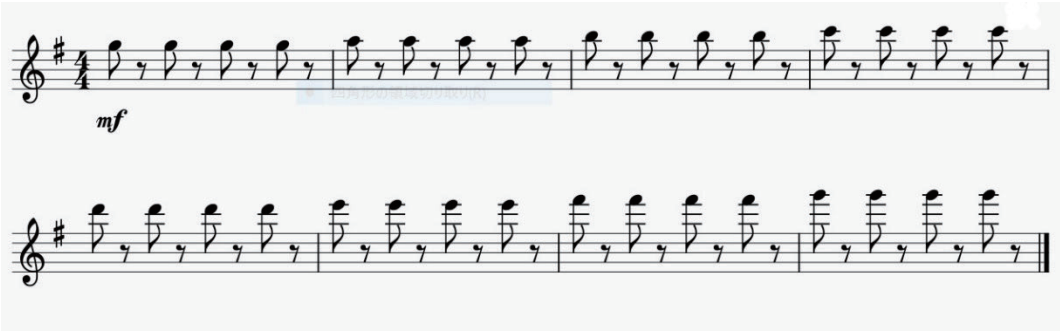



**（４）アパチュアの柔軟性を得るエクササイズ①**

方法：タンギングをせず「Fu」の発音で行う。

留意点：両唇を柔軟に保つ。譜例３を使用する。

譜例３



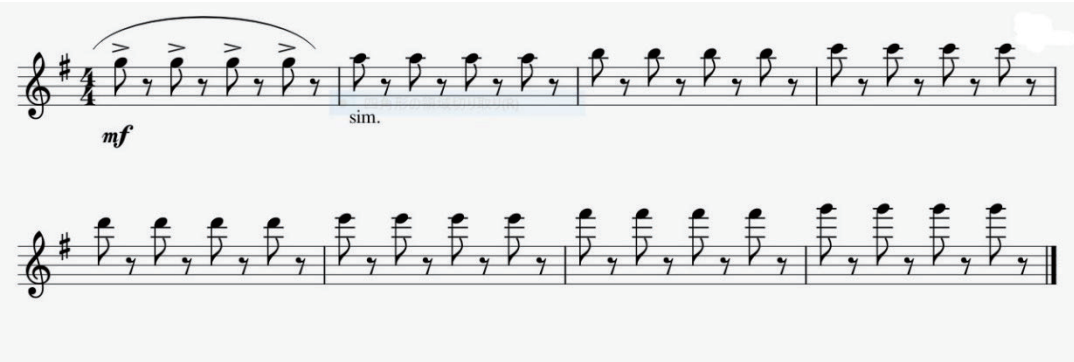

（５）アパチュアの柔軟性を得るエクササイズ②

方法：タンギングをせず「Fu」の発音で行う。

留意点：唇のコントロールに頼らずに勢いのある空気の流れを作る。

譜例４を使用する。

譜例 4




まとめ

前章のエクササイズはあくまで一例に過ぎず、実際の練習では学習者の習熟度に沿って音域や強弱記号を選択する必要がある。

バズィング音はフルート奏法上のトラブルの一つであることは間違いない事実だが、一方でバズィング音が発生した時に我々は適切な緊張を超えて自分

が誤った奏法に傾いていることを思い知ることができる。誤りを自覚し、正しい奏法を見つけ出すのは自分自身である。今回の調査から示唆を得て考案したエクササイズが、その一助となるよう願っている。

## 参考文献

フロイド、アンジェリータ・スティーヴンス 1995『フルート奏法 成功への鍵　ジェフリー・ギルバートのレッスン・システム』榎田雅祥訳、音楽之友社。

ネルソン、ブルース 2010『アーノルド・ジェイコブスはかく語りき』小関馨子訳、杉原書店。

ポーター、モーリス・M 1979『アンブシュア』大室勇一、荒木雄三共訳、全音楽譜出版社。